会員だより

セレブの文化を巡って 江戸から昭和時代の東京セレブの文化を巡る（その１　赤坂迎賓館）

私の明治維新150周年事業見学東京版は東京迎賓館から始まった。前日、同じ事業で京都迎賓館を見学し、翌朝の新幹線に乗って、赤坂に11時に着いたのだから、我ながら物好きとしか言わざるを得ない。連絡を取ると、当日客が少ないからと言われ、ネット予約の12時を早めてもらえた。それでも長蛇の列である。東京赤坂迎賓館はかって紀州徳川家の江戸中屋敷があった場所に、10年の歳月をかけて明治42年（1909年）に東宮御所（皇太子の居所）として建設された。明治の建築学を現東京大学で教鞭をとっていたジョサイヤ・コンドルの愛弟子の片山東熊（かたやまとうくま）の総指揮の下に、当時の一流建築家や美術工芸家などが総力挙げて建築した西洋風宮殿建築です。戦前、昭和天皇や今上陛下が一時期住まわれたとか、戦後、国に移管され、国会や行政機関に使用されていた。戦後数十年経って、外国の賓客を接遇することが多くなって、その施設性が高まり、ここ赤坂離宮が決まった。その後５年余り、百億円余りの経費をかけて改修され、昭和49年（1974年）東京赤坂迎賓館が完成した。

赤坂迎賓館通用門

開館以来、どれだけの世界各国の国王、大統領、首相などの国・公賓がこの迎賓館に宿泊し、歓迎行事、首脳会議、晩餐会など華々しい外交活動の舞台となったことか。一番最近ではベトナムの国家主席御夫妻が宿舎とされ、天皇・皇后両陛下がお別れの挨拶をされたニュースが出ていた。

赤坂迎賓館本館

国・公賓は正面玄関から入り、イタリア産の大理石、宮城県産の玄昌石、フランス産の・・・と世界から集められた名石・名品に囲まれ、赤い絨毯が敷かれた階段を上がって行かれるのである。私たちはロープが掛かっているので、離れた所で見ることが出来た。今回主席夫妻がお泊りの間は、多分一般見学者は受け付けられなかっただろうから、私は無事見学が出来てラッキーであった。ただ、こちらは京都迎賓館と違い、一切写真撮影は禁止だったので、内部をお伝え出来ず、残念だ。日本に居ながら、ヨーロッパのお城に居るような感覚になった。広さには劣るが、ベルサイユ宮殿やサンクトペテルブルグ城に負けないような豪華絢爛さを味わえる建物である。平成21年、創建当時の建造物である迎賓館赤坂離宮の本館、正門、主庭噴水池などが明治維新以降の建造物としては初めて国宝に指定された。江戸時代終わり頃より明治にかけて、西洋文化にあこがれ、急速に知識・技術を広め、取り入れた日本人の柔軟性にあらためて感心、感激をした。今回和風別館に廻れなかったが、そちらもさぞかし技術の粋を集めたものだろうと察しが付く。

赤坂迎賓館本館のシンボル

赤坂迎賓館主庭の噴水

その二～四は、ＶＧ槻輪のホームページをご覧下さい。

記・写真：上村サト子

愛新覚羅嫣生（こせい）さんゆかりの朝顔

お友達から一昨年、嫣生（こせい）さんゆかりの朝顔の苗を一株頂き育てましたがほとんど花が咲かずやっと秋口に花をつけ種が少し取れました。

今年はその種（１０粒ほど）を２つのプランターに植えました。

7月13日の朝に花が咲きました。

嫣生さん・・・・福永嫣生さん・・・と言えば、最後の満州国皇帝、愛新覚羅溥儀の弟、溥傑に嫁いだ嵯峨家の令嬢、浩さんの次女です。

嵯峨公爵家からお嫁に行かれた嵯峨浩さん、彼女の著書「流転の王妃」がベースのドラマが朝日ＴＶで放送されましたね。

満州から日本に引き上げるまで陸路で３年、離れ離れの夫と再会出来るまでまた１５年もかかった浩さん、その前には大学生の長女を“天城山心中”で亡くされてもいますし、一人の人生にドラマが凝縮され過ぎと言うほど波乱万丈です。

浩さんがこの朝顔の種を持って日本から夫の居る北京へと旅立たれたのが昭和35年(1960年)です。その後の”文化大革命”の時期には、ご夫妻は過激の呼び声高い紅衛兵（文化大革命を指示する学生運動家）に自宅を襲われたりもしているので、この朝顔もよくぞ生き残れたものだと世代を紡ぐ奇跡のような不思議に感慨深いものを感じます。

この花の苗を下さった方のお嬢さんが、この春ご主人の転勤で、御一家で中国北京に行かれました。中国での生活に一日も早くなじまれ、無事故で過ごされることを願っています。

我が家で綺麗に咲いてくれている朝顔はまだ１株ですが他の株にも花が咲いてほしいです。いくつかは種を残して欲しいと願っています。

私もまた贈られた時と同じ様に日中友好の朝顔の謂れと共に他の方に少しでもお譲りしたいと思っています。

記：大岡津奈子